

グローバル人材は養成できるか

国際間で人々が行ったり来たりすることが増え、「グローバル人材」の養成ということが日本でも盛んに言われるようになってきた。「グローバル人材」とはどのような人材なのか、はっきりしない点はあるが、政治、経済、文化交流など、多くの分野で言語や文化や国籍の壁を越えて活躍できる人材がますます必要になっていることはまちがいない。そのようなニーズは、当然、教育システムにも反映される。例えば日本でも他の非英語圏の大学でも、英語だけで専門の授業を受けて卒業できるプログラムが増えている。海外留学を必修とするプログラムも増えてきた。

そんな折、経済学者、松井彰彦氏の興味深い論考を目にした。「『グローバル人材』は自ら育つ」というものである（朝日新聞 2014 年 8 月 26 日朝刊）。松井氏は、いくつかの組織や人の事例を挙げているが、意見のポイントだけをまとめてみよう。グローバル人材とは、すなわち「権力にへつらわず、自由を愛し、干渉を嫌う人間」であり、「強制では、グローバル人材は育たない」のであり、「教育者と学生の強い想いがぶつかり合わなくては意味がない」「下手にレールを敷けば、敷いたレールの上しか歩もうとしない人材しか育たない」ということであり、留学を必修にしても意味がない、ということである。

レールの敷かれた留学であってもそこで目が開かれる学生もいるかもしれない。留学から帰ってきた学生の多くは国内で学んでいたときと何か違うものをつかんでくることが多いとも言われる。そもそも留学が必修であることを知っていてそのプログラムを選んだのだとすれば、学生自身が進んで留学を選択したとも言える。

しかし、確かに、少なくとも日本では、“グローバルな感じ”の人には、レールからはみ出た人が少なくない。日本のプロ野球で投手として大成功を収めながら、それをやめて、実力の割に合わない契約でアメリカ大リーグに挑戦した野茂英雄氏。その後の大活躍が、後に続く多くの日本人大リーガーを生み出したことはよく知られている。イチロー（鈴木一朗氏）も日本人は投手以外（すなわち「野手」）では成功しないと言われながら果敢に大リーグに挑戦し、成功を収めた。「世界の村で発見！こんなところに日本人」（朝日放送）というテレビ番組では、しばしば海外で活躍する日本人が紹介されるが、「敷かれたレールの上を歩いてきた」というタイプの人はほとんどいないと言ってよいだろう。

そういう私自身も二度の海外留学を経験し、いまは世間的に見ればうんと「グローバル」な仕事をしているが、もともとは大学の学部課程では日本語と日本文学を専門にしていた。どのようにグローバルになってきたのかと言えば、確かに自分の関心と能力に導かれるままにそのときどきで道を開いてきたとしか言いようがない。自分が学部生時代に 2 年間留学したのは国費だったが、当時、周囲で国費留学の制度を知っている人は少なく、たまたまアンテナを張っていたらそこに情報が引っかかってきたという感じだ。そこから知っている人に尋ねて情報を集めて自分で手続きをして、何とか留学先にたどり着いたときはいつの間にか不思議なところに来てしまったという気持ちだった。40 代でフルタイムの大学准教授の仕事のうち捨てて海外の博士課程に留学したときは、周りか

ら勇気がある、よくやるね、などとよく言われたが、それも自分なりに何とかなる、何とかしなければならぬ、いましなければ一生後悔する、と考えた上で決めたことだ。自分の目と耳と足で情報を集めて、留学の手続きも代理店などには頼まずにすべて自分で進めていった。

こう考えてみると、学校が用意した留学で、手続きもほとんど学校が進めてくれて、質問も学校が仲立ちになって答えてくれるというような留学では、意義が半減するような気がする。実際に異文化の中で暮らすには、仕事や学業以外に解決しなければならないことがいろいろあり、それをある程度自分で解決できなければ、仕事も学業もうまくできないと思うのである。まして、必修というのでは、受け身になるかもしれない。どこかで甘えが生じ、うまくいかなくても言い訳をする余地ができてしまう。

初めに紹介した松井氏の指摘には、もう一つ、興味深い点がある。日本を初めとして、多くの政府の考える「グローバル人材」には、「(その国の) 成長戦略に資する人材」であり「“〇〇人” (例えば「日本人）」としてのアイデンティティが確立された人材」という意味合いが含まれているが、実はグローバル人材とは国家よりも先に世界のことを考える人材である。つまり、ある国家のためにグローバル人材を養成するというのは、それ自体が矛盾した考え方なのである。だからこそ、「権力にへつらわず、自由を愛し、干渉を嫌う人間」(前出松井氏)なのである。ある国の政府は国家にへつらわない人材を歓迎するだろうか。世界のためになることがそれぞれの国家にとっても有益であれば歓迎するだろう。しかし実際にはそうでない場合もあるかもしれない。そう考えると、やはりグローバル人材は「養成する」ものではないのだろう。個人的には、言語・コミュニケーションの能力や世界の諸々に関する知識のほかに少しだけ教えられることがあるとすれば、批判的・創造的に考える力をつけることだろうと思っている。習慣や伝統に縛られず、人間に共通する普遍的なあり方に寄り添うセンスこそが、グローバルなのだと思う。

真のグローバル人材は「仕向ける」ことはできても「養成する」ことは難しく、留学必修のようなプログラム以外のところから出てきやすいのだろう。そもそも人材とは「出てくる」ものであって、「育てる」ものではないのかもしれない。自分自身も、知らないところで知らないものを見たいという気持ちは子どもの頃から人一倍強かった。人と違うことはいいことだと思っていたような気がする。生まれつきなのかそう育てられたのかは、よくわからない。果たして「グローバル人材」を「養成する」ことはできるのだろうか。

(松下達彦、2014年8月30日書き下ろし)

参考：松井彰彦「『グローバル人材』は自ら育つ」(耕論) 読み解き経済『朝日新聞』東京本社版、
2014年8月26日朝刊